都道府県名	岡山県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	御津町立南小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	１	１	１	１	２	１	１	８	１４
児童数	２９	３７	３８	２５	４８	３３	２	２１２	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

確かな学力を育てる指導法　　～　算数科を通して　～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

全学年，算数＜数と計算領域＞（子どもの理解度に差が出やすく、各学年に基礎的な学力の定着ができていない児童がいる。また、結果がデーターとして分析しやすいと思われるため）

(2)　年次ごとの計画

平成15年度

○　テーマ
　確かな学力を育てる指導法

○　研究の見通し
　これまでの指導の在り方を見直し、基礎基本を身につけさせ、個に応じた指導を工夫していけば、児童は学ぶ楽しさを体感したり、学び方を習得したりして、確かな学力を身に付けていくであろう。

○　研究の内容・方法

基礎研究

①　全教育活動を振り返って、学級経営、教科指導の仕方を見直し、日々の教育活動に生かす。

＜方法＞

・　学習の基礎・基本を大きく３つの段階に分け分析。それぞれの段階で取り組めることを考え、実践した。
・　全教員に日々の授業の中で高めていきたい指導の方法や内容についてアンケートを実施し、その結果から一人１テーマを選択し、受け持ったテーマについて校内研修を進めた。
・　学校行事を見直し、児童が感動できる、存在感や充実感をもつことができるものを取り入れるよう努めた。
・　朝の活動時間を見直し、全校で朝読書を行う時間を設けた。
・　学校の取り組みを学校だより、学級懇談、学校評議員などを通して知らせたり、保護者や地域の人々からも意見をいただいたりするようにした。また、学校が目指していることを学校朝会やがんばり貯金などを使って児童にも知らせ、意識させてきた。

②　算数科の教材研究を深める。

＜方法＞

・　各学年の年間指導計画を見直し、１時間１時間で教えなければならないねらいを明確にした。
・　６年間を通しての系統図を作成することで指導のつながりを明確にし，つまずきに対応できるようにした。
・校内研究授業

６月１０日	３年生	大きな数
	５年生	小数のかけ算（１）
９月　８日	５年生	小数のかけ算（２）

１０月２４日	２年生	かけ算（１）
	４年生	わり算（２）
１月１６日	１年生	１００までの数
	６年生	割合を使って

・　岡山大学教育学部助教授、黒崎東洋郎先生や岡山県教育センター、楠博文先生に来ていただいて、算数科の研修を行った。主な研修内容は次の通り

○　教材研究のあり方
　　教材解釈、課題づくり、発問、助言
○　個に応じる手だてのあり方
　　ヒント、算数的活動、指導形態、個人差
○　評価
　　絶対評価、到達度評価、形成的評価

個に応じた指導のための研究

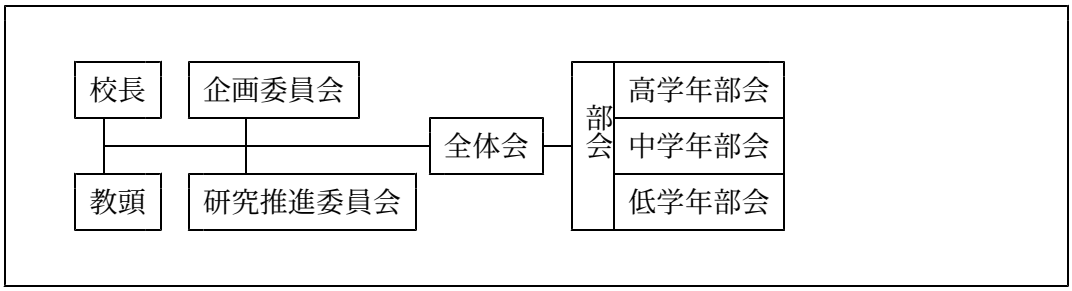
①　指導事例をもとに個に応じる指導について検討し、改善を図る。
＜方法＞
・　学習前の児童の習熟差を考慮した指導案を考えた。
・　単元導入前のプレテストを行うことで習熟度別指導のコース分け、指導方法の手がかりとした。
・　内容によりＴＴで行う場面を作ったり、習熟度別クラスに分けて指導したり、指導の仕方の意図を指導者がもって、指導にあたった。
・　等質の少人数グループ指導から、授業の進度だけでなく，グループごとに問題やねらいを変化させた少人数グループ指導に変更し、個への対応を図った。
・　ヒントカードや指示カードなど自力解決の場での個に応じた指導方法について考えた。

②　児童の既習事項の定着度を把握する。
＜方法＞
・　学期ごとにその学期で学習した「数と計算」領域を中心とした全校テストを実施し、学習状況をデーター化した。

③　朝の学習の時間を発展と補充のための時間に変更。
＜方法＞
・　教科書１時間１時間に対応した系統立てたプリントを準備。一人一人の学び残しを把握、補充できるように、１５分間の学習時間のシステムを工夫し、複数の教師で１クラスを指導している。学習したプリントは児童一人一人がファイルすると共に、個人カルテにプリントの進度、つまずきを記録することで、学びの過程がわかるようにした。

平成16年度	○　テーマ 　　確かな学力を育てる指導法 ○　研究の見通し 　　これまでの指導の在り方を見直し、基礎基本を身につけさせ、個に応じた指導を工夫していけば、児童は学ぶ楽しさを体感したり、学び方を習得したりして、確かな学力を身に付けていくであろう。 ○　研究の内容・方法 ・　授業１単位時間の指導過程の見直しと授業の充実 ・　児童の反応の予想とその支援についての研究 ＜方法＞ ・　授業研究による、個に対応することのできる授業の開発 ・　研究授業の授業反省からの指導法の改善 ・　先行研究の追試と改善

(3)　研究推進体制



Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

基礎研究

①　全教育活動を振り返って、学級経営、教科指導の仕方を見直し、日々の教育活動に生かす。

・　板書の仕方、ノートのまとめ方や学習規律について共通理解を図り、落ち着いた雰囲気で授業をすすめることができるようになった。
・　家庭学習の内容、発達段階に応じた学習時間、長期休業中の課題の改善等をおこない、懇談会などで保護者に説明することで、家庭学習について、家庭との共通理解を図ることができた。
・　全職員による、一人１テーマの研修を行うことで、それぞれが担当する内容について、主体的に研修を行い、各教職員に広めることができた。
・　高学年を対象としたプロの和太鼓演奏家による演奏会や講座、マリンバ奏者を招いての音楽会など、本物にふれる活動を通して、児童に感動体験を多くさせることができた。
・　週２回の朝の読書の時間を中心に、児童は本に触れる時間を多くもつことができた。全校児童の読書量が増え、また、朝読書では落ち着いた雰囲気で一日の始まりを迎えることができるようになった。
・　朝読書の読み聞かせボランティアや地区老人会が中心となったシルバーボランティアのクラブ活動や総合的な学習の時間への積極的な参加など地域を挙げての学校のサポート体制ができつつある。

②　算数科の教材研究を深める。

・　本校の授業時数に合わせた１時間１時間の授業内容を考えた年間計画や６年間の「数と計算」領域の系統図を作成した。このことで、既習事項を指導に生かしたり、単元での学びを残さないよう、確実に定着を図ろうとしたり、教師が１時間１時間のねらいをより明確に考え指導できるようになった。
・　学習問題の提示の工夫、問題から課題へ高めるための指導の素地ができつつある。
・　問題場面を念頭操作ではなく算数的活動を取り入れたものにすれば、学習課題をつかませやすいということがわかった。
・　資料の収集により、多くの算数的活動を比べ、適切な活動を授業に取り入れるように考えはじめた。
・　自力解決の見取りと予測が大切であること、児童が主体的に活動するためには算数的活動が重要であることがわかり、授業の中で工夫するようになってきている。

個に応じた指導のための研究

①　指導法の改善

・　個に応じるための指導案を作成した。中心となる児童の意識の流れを記した指導案から予想される児童の反応とその支援について記した指導案に改善されだした。このことで、児童一人一人が充実感をもって授業に取り組めるようになってきている。
・　単元の流れ、４つの観点による評価場面と方法、規準を細かに指導案に記入した。しかし、指導案が煩雑になりすぎたので改善していく必要があることがわかった。
・　導入場面では、具体物を使って操作活動をしたり、身近な話題から問題を設定したりして、児童一人一人が興味をもって、自分自身の課題と

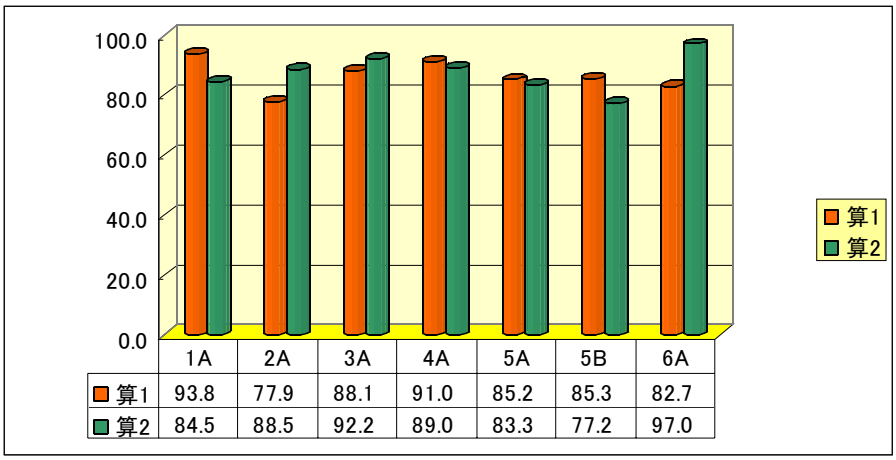
してとらえられる学習場面なるよう工夫した。

・　自力解決場面では、個に応じるためのヒントカードを用意したり、個を把握するための座席表などを活用したりした。

・　少人数指導を取り入れ、より個人差に対応できるようになってきている。少人数でのコース別の学習では、既習事項の定着度を事前のテストで調べ、コース分けの参考にするなど、単に機械的に少人数グループで指導するのではなく目標や取り扱う問題に変化をもたせ指導することができた。

・　子どもたちの学習スタイルに応じて、自力解決の場面でより支援が必要な児童を集め、小グループの形態で指導したことにより、一人一人の児童が充実感をもち、じっくりと落ち着いて授業に取り組むようになってきている。

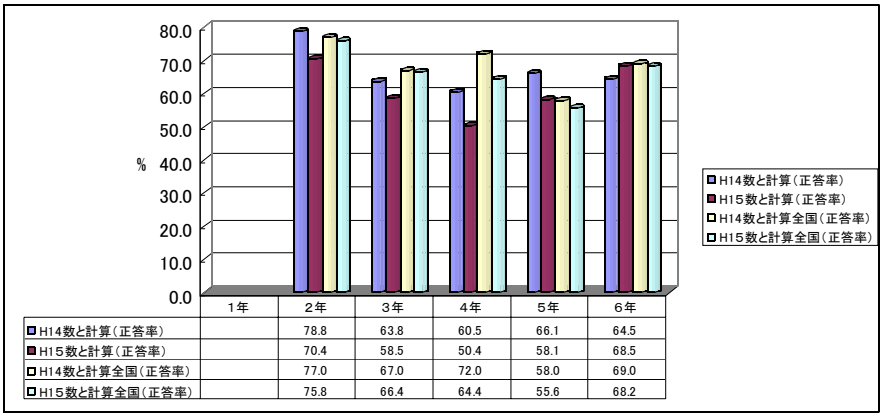
・　全校計算テスト（１学期末，２学期末実施結果）



	1A	2A	3A	4A	5A	5B	6A
算1	93.8	77.9	88.1	91.0	85.2	85.3	82.7
算2	84.5	88.5	92.2	89.0	83.3	77.2	97.0

問題が異なっているため単純に比較検討できないが、少人数指導を行っている学年（２年、３年、６年）でのテスト平均点が上昇している。

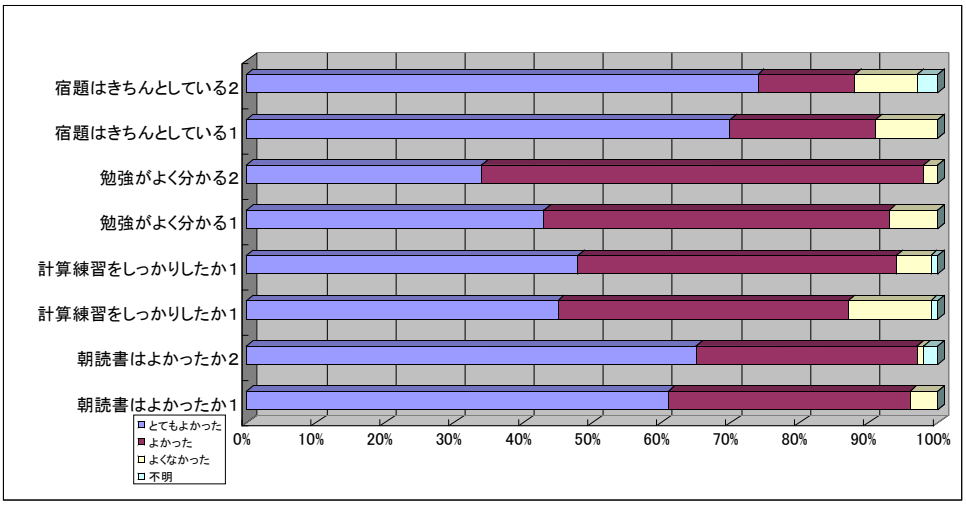
・　教研式標準学力テスト（算数科の数と計算領域の結果）



	1年	2年	3年	4年	5年	6年
H14数と計算（正答率）		78.8	63.8	60.5	66.1	64.5
H15数と計算（正答率）		70.4	58.5	50.4	58.1	68.5
H14数と計算全国（正答率）		77.0	67.0	72.0	58.0	69.0
H15数と計算全国（正答率）		75.8	66.4	64.4	55.6	68.2

比較しにくいデータのため，プラス評価の傾向は出なかった。
昨年度と今年度の実施時期が異なること（昨年３月中旬、本年２月上旬）、特に今年度は学年により未学習の内容を含んでいることなど直接比較しにくい。

・　４，５，６年生意識調査



１学期と２学期の比較でそれぞれの項目のプラス評価の傾向は向上している。

２．今後の課題

評価について
・　授業の中で、到達度評価と形成的評価を使い分けて的確でかつ簡単な評価をする。

実際の授業について
・　自力解決場面での対応、算数的活動の工夫をさらに充実させて、個に応じる指導を展開する。
・　数学的な考え方を指導の中で重視することで、生きる力の育成の一つとして取り組む。
・　授業の意図が伝わりやすい簡潔な指導案を作成する。

成果の裏付けについて
・　意識調査も含め、成果の根拠となる数値データの収集を検討する。

フロンティアスクールとしての成果の公開と普及
・　本校で研究したことを広めていく。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

定期的な学力検査の実施（年１回）
全校児童対象の学期ごとのテスト

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

・　平成１６年１０月２７日，御津町立南小学校で授業公開、研究発表会実施予定。
・　ＨＰ作成予定

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級
☑１３～１８学級　□１９～２４学級
□２５学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導
□一部教科担任制　□その他

【研究教科】　□国語　□社会　☑算数　□理科
□生活　□音楽　□図画工作　□家庭
□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　□無